状地（せんじょうち）だった平地の場合は、「扇状地面（せんじょうちめん）」として分けることがある。（→p 49）

団体入植（だんたいにゅうしょく）：近くに住む人たちが集まり、また、大きな農場にやとわれ（小作となり）、開拓するために集団で移住すること。（→p 166）

単細胞生物（たんさいぼうせいぶつ）：生まれてから死ぬまで、ひとつだけの細胞（さいぼう）で体ができている生き物。⇔多細胞生物（たさいぼうせいぶつ）

断層（だんそう）：地層や岩盤（がんばん：岩の板）に力がかかって割れ、割れ目にそってずれたところ。これからも動く可能性がある断層を「活断層（かつだんそう）」という。

ち

チェㇷ゚（アイヌ語）：魚のこと。

稚魚（ちぎょ）：すべてのヒレのスジの数が、成魚と同じになってから、ウロコができあがるまでの間の魚。その前は仔魚（しぎょ）という。

治水（ちすい）：洪水（こうずい）による水害から人間の生命・財産・生活を守ること。おもに川自体や川にかかわる施設（しせつ）などを整備すること。（→p 211）

チセ（アイヌ語）：家のこと。平地式住居。（→p 130）

チㇷ゚（アイヌ語）：舟（ふね）、とくに丸木舟（まるきぶね）のこと。（→p 128）

チャシ（アイヌ語）：アイヌ文化期につくられた、高台の地面に一本から数本のみぞ（壕：ごう）がめぐらしてあるところ。目的ははっきりとわかっていないが、伝承によると、戦いの時の砦（とりで）、カムイがやってくる場所、見張り場、話し合い（チャランケ）の場所、などとされている。1669 年のシャクシャインの戦いの時、シャクシャインはシベチャリチャシ（新ひだか町静内）を砦として利用した。チャシのあとのことをアイヌ語ではチャシコッ（チャシあとの意味）といい、豊頃町の安骨（あんこつ）は元はチャシコッにあてた字だった。（→p 116）

柱状節理（ちゅうじょうせつり）：節理（せつり）とは、ズレがないひび割れのこと。岩体が冷えて体積が収縮する時、このひび割れがタテに入ることで、岩が柱のように分かれる。この場合の割れ目を柱状節理という。層雲峡（そううんきょう：上川町）が有名だが、十勝でも、屈足（新得町）や黒石平（上士幌町）などの川ぞいで見ることができる。（→p 37）

徴兵（ちょうへい）：国が国民を強制的に軍隊に入れること。（→p 196）

て

泥炭（でいたん）：湿原（しつげん）でかれた草などの分解がすすまず（あまり土にかえらず）、炭のようになっていったもの。石炭になり始めの段階。

堤防（ていぼう）：川の堤防は、流れにそって土などを長く盛り上げ、川の水が増えても下流に流せるようにしたもの。（→p 211）

寺子屋（てらこや）：江戸時代にあった、あまり身分が高くない人のための学校や塾（じゅく）のようなもの。武士・僧（そう）・医者などが先生となり、習字・読み方・そろばんなどを教えた。明治時代の十勝では、開拓地（かいたくち）にあった寺で僧が先生となって教育したところをいう。（→p 168）

と

頭首工（とうしゅこう）：川や湖などの水を用水路に引き入れるための施設（しせつ）。ふつうは、せき、取り入れ口、そしてそれにともなう施設（しせつ）から構成されている。千代田堰堤（ちよだえんてい）は頭首工の一部にあたる。（→p 214・p 194）

凍上抑制層（とうじょうよくせいそう）：冬になると地面（の水分）がこおる。寒さがきびしいと地中までこおりつき、土の体積が大きくなることで地面が持ち上がり（凍上し）、道路の舗装（ほそう）などをこわす。そこで、道路工事などの時、寒くなってもこおりつかない深さまで土をとりのぞき、水はけがよく、こおりつきにくいもの（火山灰や砂利〔じゃり〕など）を厚くしく。この層のことを凍上抑制層という。（→p 39）

十勝組合（とかちくみあい）：明治時代に入り、開拓使（かいたくし）によって、それまでの交易や産業に対する商人による支配がなくされていくが、十勝では支配がなくなることにより、道路や宿などの管理者がいなくなること、アイヌ民族のかせぐところが失われ、さらに和人が漁場や山野に入ってくることで、アイヌ民族の暮らしが成り立たなくなることが予想された。そこで明治８年（1875）、開拓使の強いすすめにより、それまで支配商だった福嶋屋（ふくしまや）（杉浦家）の支配人である若松忠治郎（わかまつちゅうじろう）を中心にした和人６人とアイヌ民族７人を代表とする「十勝組合」がつくられ、十勝の産業（漁や狩り）と交易を管理、発展させた。実質的な活動は明治10～12年（1877～79）だったが、かなりの利益をあげ、福嶋屋杉浦家からの借りを返し、教育所を建て、病院新設にもお金を出し、残ったお金を代表13人と和人40人あまり、アイヌ民族277戸で分けた。この十勝組合の発展を知った和人が、十勝での漁や狩りの解放を求め、また、交易や密猟（みつりょう）をおこなうためやってくるようになった。十勝組合は明治13年（1880）に解散した。（→p 145）

土器（どき）：粘土（ねんど）をこねて形にし、火で焼いて作ったナベやカメなどの器（うつわ）のこと。土器が使われるようになって縄文文化（じょうもんぶんか）に入る。表面に付けられた文様（もんよう：もようのこと）や形は時代や時期によって変化する。北海道では擦文時代（さつもんじだい）まで使われ、アイヌ文化になって使われなくなる。

土偶（どぐう）：人の形をした土製の焼き物。（→p 95）

渡船（とせん）：橋がないところで川をわたるための舟（ふね）。人とちょっとした荷物が乗るくらいのものから、自動車やバスを運んだものまでいろいろある。渡し舟（わたしぶね）ともいう。渡船の舟着き場（ふなつきば）を渡船場（とせんば）という。（→p 176）

砦（とりで）：外敵から大切な場所を守るためにつくる構築物。

な

ナイ（アイヌ語）：川のこと。厚内（あつない）・札内（さつない）・糠内（ぬかない）・長流枝内（おさるしない）・新内（にいない）などの「内」は、この「ナイ」にあてた漢字。（→p 127）

に

二級町村（にきゅうちょうそん）：町村長は国から任命されるが、

町村会の議員は住民が選ぶことのできる町や村。

ぬ

ヌサ（アイヌ語）：イナウをいくつも立てた祭だん。各家の外の上流側にあり、カムイノミ（カムイへのいのり）の時などには、新たに作られたイナウが立ちならぶ。（→p 134）

ね

粘土（ねんど）：岩石や鉱物（こうぶつ）が、とても細かくなったもの（直径1/256㎜以下）。水分があるとねばりけがあり、いろいろな形を作ることができ、熱すると固くなる。土器や陶器（とうき）などをつくる材料となる。

の

農地改革（のうちかいかく）：農地の所有制度を改めること。とくに第二次大戦後、昭和22年（1947）から、連合国軍最高司令官総司令部（GHQ）の指令によって行われた日本農業の改革で、農地のあるところに住んでいない地主（不在地主）のすべての農地と、農地の近くに住んでいる地主の貸しつけ地のうち保有限度（北海道で４㌶）をこえる農地を国が（安く）買いとり、小作者に売りわたして自作農にしたことを指す。（→p 149・p 185）

農地解放（のうちかいほう）：大農場や地主が小作者（こさくしゃ）に土地を分けあたえ、自作農にさせること。（→p 185）

は

場所（ばしょ）：江戸時代（えどじだい）、松前藩（まつまえはん）がアイヌ民族との交易をするために北海道を区切ったが、その区切りを「場所」あるいは「商場（あきないば）」といった。十勝地方は「トカチ場所」とされた。（→p 137）

場所請負制度（ばしょうけおいせいど）：はじめ、アイヌ民族との交易のために区切られた「場所」では、松前藩（まつまえはん）の上級家臣が直接交易を支配をしていたが、のちに、商人がその家臣や松前藩に対してお金を支はらうことで、一定期間、その「場所」で交易することができるようにされた。その制度のことを場所請負制度という。（→p 140）

は虫類（はちゅうるい・爬虫類）：ワニ、トカゲ、ヘビ、カメの仲間のこと。絶めつした恐竜（きょうりゅう）もこの仲間といわれている。

発掘・発掘調査（はっくつ・はっくつちょうさ）：昔のできごとや暮らし、生き物のことなどを調べるために、地面をほること。一度ほってしまうと元にはもどせないので、しんちょうにおこなわれる。遺跡（いせき）の場合、文化財保護法（ぶんかざいほごほう）によって、発掘が禁止されていて、工事などでこわされてしまう場合か、学術的に必要な場合だけ許可されている。

馬頭観音（ばとうかんのん）：もともとは、観音（かんのん）が変身したすがたの一つで、迷いをなくし悪を破壊（はかい）する菩薩（ぼさつ）だった。それが、時がたつうちに、馬を病やケガから守る力をもつものとして、信仰（しんこう）されるようになっていった。馬頭観世音菩薩（ばとうかんぜおんぼさつ）。

氾濫（はんらん）：川の水がふだん流れている水路からあふれ出すこと。堤防（ていぼう）がある場所では、堤防からあふれ出すことをいう。

氾濫原（はんらんげん）：洪水（こうずい）で川から水があふれることでできた、ゆるい傾斜（けいしゃ：かたむき）の土地。川の流れとあまり高さが変わらず、洪水の時水があふれやすい場所で、また、川の流れが移る可能性があるところでもある。

ひ

引き揚げ者（ひきあげしゃ）：昭和20年（1945）まで日本の支配下にあったり日本領だったところに暮らしていた日本人で、敗戦によって今の日本領に帰ってきた人のこと。（→p 185）

樋門（ひもん）：堤防（ていぼう）の下をくぐるとびらのついた水路のこと。堤防があっても水の出入りができるようにするためのもので、洪水（こうずい）の時にはとびらが閉じられる。（→p 213）

氷河（ひょうが）：長年にわたって積もった雪が、その重みで固まって巨大な氷となり、ゆっくりと斜面（しゃめん）を下っていくもの。（→p 52）

氷期（ひょうき）：地球の気候が長い間（数万年以上）寒くなる時で、氷床（ひょうしょう）や氷河（ひょうが）が広がる時。正確には中緯度（ちゅういど）の非山岳（ひさんがく）地帯に氷床が存在している時期。過去に何度もあり、氷期と氷期の間の暖かい時期を「間氷期（かんぴょうき）」という。最も最近の氷期（最終氷期）は約８万～１万年前だった。（→p 52）

ふ

風化（ふうか）：地表にある岩石が、空気・日光・風雨雪・温度などにさらされることで、だんだんとこわれていくこと。

風俗（ふうぞく）：衣食住など暮らしの中における決まり事やならわし、身なりなど。

ふ化（ふか・孵化）：生き物が卵からかえること。または、生き物を卵からかえすこと。

ふ化場（ふかじょう・孵化場）：生き物の卵をかえすための場所。この本では、サケのふ化場のことをいう。サケのふ化場では、川でつかまえた親ザケが成熟するまで池で育て、サケのメスから卵を採り出し、オスの精液をかけて受精させ、卵を育て、サケの子ども（仔魚：しぎょ）をふ化させ、稚魚（ちぎょ）になるまで育て、時期を見て川に放流する。

複合古砂丘（ふくごうこさきゅう）：砂丘（さきゅう）ができたあとしばらくたってから、新しい砂漠（さばく）ができた時、前の砂丘（古砂丘〔こさきゅう〕）の上に新しい砂丘が重なるようにしてできた、二重の古砂丘のこと。十勝では約４万年前の支笏（しこつ）火山灰による古砂丘の上に約１万８千年前の恵庭（えにわ）火山灰による古砂丘ができ、複合古砂丘となっている。（→p 61）

副葬品（ふくそうひん）：亡くなった人といっしょに墓に入れられるもの。生前使っていたものや、死後の世界で使うもの、死者の霊（れい）をなぐさめるものなど。

プレート：地球の表面すべてをおおう、厚さ約100kmの岩盤（がんばん：岩の板）のこと。大きく分けて十数枚あり、つめがのびるくらいの速さでたがいに動いている。（→p 23）

噴煙（ふんえん）：火山灰や火山ガス、水滴（すいてき）などが一体になってふき出し、煙（けむり）のように見えるもの。火口から立ち上った噴煙をとくに噴煙柱（ふんえんちゅう）という。

噴火（ふんか）：火口（かこう）からマグマや火山ガスがふき出すこと。同時に火道（かどう：マグマの通り道）にあった岩石